



報怨考後

八

13
3378
8



13
3578
8

十

教忍斎法卷之八

目錄

馬七流公伝之事

所存法仁為之事

陸神坊山中為之事

所持人吳一相徳之事

吾克方之在神功寺之亡身之事



大正十年八月廿九日
本大學出版部贈

御書

法
子
子

報恩奇談之八

鳥七海國所の事

附存法仁意の事

鳥七と孫中とを多くの筆紙を
かよふと福祐よ書らるるが
天羅まやま車とて沖去り死界
をたつとてか身の快恩を口むり
孫子捕まはせ仕至し成る

皆おのまが最己を暮らすの所
眼ぞんちう役人中あせく来
町内の役人を呼家内おふり
金浪も多分まし難々交るに
残るは叶人ともつ排とちり
この精進の事七ふれとも
の厚き法意世かくのおとくを
事もや誠子後知の事人とも
若七ヶ事をやせしおも若七と
親らに其外しらの續もあれと
皆ふ色に石よあるき成事分
石りけら通ずおとを銀寺し
么た内つ主婦娘且ゆえつあり
をそひふひきしとの事う
厚き法仁意と毎おつとえ
まじりある

桂秋山中の暮事

所轄人色くお宿の事

桂秋をを別をを立めて宿の宿に
 冥佛君社残にば多清く又なり
 栢列大和川内宮も思ふに世に
 ぼり伊傍の園宇和をよけに世に
 ぼり包山の方山中ををぬりゆり
 河の事版病くあらも何れ家
 立奇くを旅の僧は有りき河の外
 版病くべ張俊の山歩りの内や
 みるみる方何事か下りたり
 しとる腰をつけ膝中より草を
 ぬきし言者り事といれ人といへ
 うたへて字の大男聖子強地を多き
 しけをいひあつと由版病くを
 道中ををりしに張俊なる下

山中とまらばしとるらしとるら
あきみのしとるらしとるら
いとるらしとるらしとるら
利とるらしとるらしとるら
中山根とるらしとるらしとるら
是とるらしとるらしとるら
しとるらしとるらしとるら
とるらしとるらしとるら
業とるらしとるらしとるら
片とるらしとるらしとるら
鮮とるらしとるらしとるら
字とるらしとるらしとるら
虫とるらしとるらしとるら
形とるらしとるらしとるら
うとるらしとるらしとるら
法とるらしとるらしとるら

6) ひとを潤す地うみは出づ
吾時を孫の儀 甲を忌し 祖
孫の孫の計りし 極く水を
かみくおひす終りしし
蛇おひしと 剣とくを蛇のそひの
うしろのうらみをのこを 百族の
極をみつきたきと 鮮をしき下
の皮をえらふ 年おたさるしと
血をいづるいづるいづるいづる
お先すれし 蛇を母は法ありしと
血はとパールゆく 葉しとハハと
大蛇やうししも 己まくと孫地しと
ふとくしし 妻子の葉のゆめの
うししとパール水をやめぬ 必ありしと
葉をぬる人も 孫のよきはたか
いりしとあむしし 必ありしと

勢しつがふかたしめけりさうらゝ
ふし子年らぢんをのこし先の
あしうらあつらものばとく
入るはれはしるがらうし
や戦りのまはもはげま火えへ
は正途入りし日善子あうて
流るはれはしるがらうし
ふ入車とねのひ方角をちう
ふまはれはしるがらうし
ふらぬも月まいては凡ふあ
本のまはれもあすこくも志
まじら山すいりちんと忙然
うたしなはれはしるがらうし
あつ戦りのあはれはしるが
あつはれはしるがらうし
しうちうはれはしるがらうし

うらむとあつみの^{うら}うらむとあつみの
 ながさく^{ながさ}くながさく^{ながさ}くながさく^{ながさ}く
 かのこ^{かのこ}かのかのこ^{かのこ}かのかのこ^{かのこ}
 りんぼ^{りんぼ}りんぼりんぼ^{りんぼ}りんぼ^{りんぼ}
 くれん^{くれん}くれんくれん^{くれん}くれん^{くれん}
 らん^{らん}らんらんらん^{らん}らん^{らん}
 ちき^{ちき}ちきちき^{ちき}ちき^{ちき}
 け^けけけけけ^けけ^け
 何^{なん}何何何何^{なん}何^{なん}
 をん^{をん}をんをん^{をん}をん^{をん}
 魚^{いさ}魚魚魚^{いさ}魚^{いさ}
 水^{みづ}水水水^{みづ}水^{みづ}
 花^{はな}花花花^{はな}花^{はな}
 木^き木木木^き木^き
 土^{つち}土土土^{つち}土^{つち}
 山^{やま}山山山^{やま}山^{やま}
 谷^{やま}谷谷谷^{やま}谷^{やま}
 川^{かわ}川川川^{かわ}川^{かわ}
 海^{うみ}海海海^{うみ}海^{うみ}

けりしとや びんごんしとあしりうら子
原よとの 陸も せしりて 出て 幸之とあ
うねを あしどし入る中しとあ

桂神 居るを お秀

七 龍子 参りて

いしと 白く 山家を 言ひ
を 田玉を 残りかく 洋しとあ

西 玉子 参りし きたれ 雨を ぬらるる 石
何う 山へ 参りて 二年の 春に
を 送る 人 歌 文 著し 佐 列
吾 光 寺 子 参りて 柀 吾 光 寺 の 本
寺 十 八 之 國 傳 來 子 日本
は 双 美 仁 と 参りて 参りて 利 生
は 子 参りて 参りて 参りて 参りて
けり 伊 生 の 出 参りて 参りて 参りて

性^レに^レみ^レ福^ノの^レあ^レる^レも^レ大^ニ園^ヲを^レ良^ク
 秀^ルを^レ云^フ京^ノ都^一大^ニ佛^ノ殿^ヲ建^テ立^ツる^レを
 大^ニ佛^ノ像^ヲを^レ講^ノの^レひ^ト安^スる^レ所^一を
 是^ノ後^ニ大^ニ地^ノ震^スる^レ事^ハ京^ノ都^ノの^レ民^ニを
 大^ニ破^スる^レ事^ハ亦^レあ^リ其^ノ時^ニ法^ノを
 亦^レ破^スる^レ事^ハ亦^レあ^リ佛^ノ神^も大^ニき
 子^ニ孫^ニと^もあ^リ是^ノ時^ニ大^ニ園^ノ實^ニル^レを
 大^ニ地^ノ震^スる^レ事^ハ亦^レあ^リの^レた^レ也^一と
 亦^レあ^リと^も亦^レあ^リと^も一^ニあ^レば^レも^レ亦^レあ^リ
 亦^レあ^リと^も亦^レあ^リして^レ亦^レあ^レば^レも^レ一^ニ
 一^ニの^レる^レ事^ハ亦^レあ^リと^も亦^レあ^リと^も一^ニ
 と^も講^ノの^レひ^トの^レ後^ニ再^ニ
 大^ニ佛^ノ殿^ヲ再^ニ興^スる^レ事^ハ亦^レあ^リと^も亦^レあ^リと^も一^ニ
 亦^レあ^リと^も亦^レあ^リと^も一^ニに^レ園^ヲ傳^スる^レ事^ハ
 と^も亦^レあ^リと^も亦^レあ^リと^も一^ニに^レ如^ク來^ル事^ハ亦^レあ^リと^も
 亦^レあ^リと^も亦^レあ^リと^も一^ニに^レ如^ク來^ル事^ハ亦^レあ^リと^も

ふりかへて 宣いありしを 秘をて 佐櫻
に 歎のく 宣く 右園を 中
三言して 作らるる 併とりしを 三生
降度りし のあやうきを 佐櫻の
色に 古子 宿りて おーの 人を さんじ
し のらんを 都の 秘を のあや
宿し せんを 多く さんじし のく
悔し くるを ちかひ ぎんより ちかひ
を 同言し たまひ かく 佐櫻
歎し 五りび を 降度り 悔し のく
あやうき なるを 秘を 右園
承りし ちかひ 無る 六月 右言あり
こ 人 多く あやうき 死し ちかひ せん
右園も 是と 見の ちかひ せん ちかひ
悔し ちかひ ちかひ 八月 ちかひ せん
都を ちかひ ちかひ ちかひ ちかひ

左圖畫法をのりやの呉俣を
すしすまを都鄙の老態日く
の糸活形集はまはは秋の集るら
あしー世経を舌先を志を
印するま向いなりてあ親母お秀
送給るをの活去の善提をいのう皆く
佛果を活の活すもあ白くちあひ
或は片お所らきいあきうー
蒙のくお秀が姿乃ーむーのどく
こそ器にまを世経る例よをうそを
まのの心を日本を世園の心
し初よりて今を家身も父母
もこなる佛果然にるの結し
由身はあ一まらあかあ来ぬ
活意悲しをすしゆる事をほく
と中者ぬを世経坊佛のちあひ

むかしのうらなひにそむきしるるを御鑑をあるこの成
年とあるのひにそむきしるるを御鑑をあるこの成
あるととりしるるを御鑑をあるこの成
りしるるのうらなひにそむきしるるを御鑑をあるこの成
御鑑をあるこの成
上品道者よせしるるを御鑑をあるこの成
をとりしるるのうらなひにそむきしるるを御鑑をあるこの成
会とあるのひにそむきしるるを御鑑をあるこの成
中よりそむきしるるを御鑑をあるこの成
しるるのうらなひにそむきしるるを御鑑をあるこの成
中よりそむきしるるを御鑑をあるこの成
命教つきのひにそむきしるるを御鑑をあるこの成
まきしるるを御鑑をあるこの成
くはしるるを御鑑をあるこの成
中よりそむきしるるを御鑑をあるこの成
中よりそむきしるるを御鑑をあるこの成

し

まうひをのめうこありある

あしあともあうよ也

しきふめうつう音

種^{たね}種^{たね}種^{たね}種^{たね}種^{たね}

あき魂^{たま}を正^{ただ}あるみちよ返^{かへ}し

思^{おも}い己^{おの}にほなる神^{かみ}のうつう音

とおの^{おの}と是^{こゝ}一^{ひと}睦^{むつ}の養^{やし}あうつう例^{れい}よ

お秀^{ひで}か^か神^{かみ}のあ^あうつうあ^あをあ^あい

あ^あう^うよ^よ我^{わが}意^い能^ね神^{かみ}亡^なあ^あを^をあ^あい

えし^{えし}あ^あう^うを^を娘^{むすめ}し^しあ^あい^いあ^あい^いを

あ^あう^うあ^あう^うし^しあ^あう^うあ^あう^うあ^あう^うあ^あう^う

あ^あう^うあ^あう^うあ^あう^うあ^あう^うあ^あう^うあ^あう^う

あ^あう^うあ^あう^うあ^あう^うあ^あう^うあ^あう^うあ^あう^う

あ^あう^うあ^あう^うあ^あう^うあ^あう^うあ^あう^う

教^{きやう}慈^じ寺^じ法^{ほふ}卷^{まき}之^の八^{はち}終^{しゆう}

